

(大辞林 第三版より)

曹操 (155～220) 中国、三国時代魏(ぎ)の始祖。字(あざな)は孟徳。諡(おくりな)は武帝。廟号(びようこう)は太祖。黄巾の乱を平定。後漢の献帝を擁して華北を統一したが、江南進出は劉備・孫権の連合軍に阻まれた。詩賦をよくした。

★男の三種類 「士・俠・漢」(士大夫、武俠、好漢)

★武闘、文闘 ★借屍還魂 ★乱世の姦雄

【月旦評】 十八史略

嵩与沛国曹操、合軍破賊。操父嵩、為宦者曹騰養子。或云、夏侯氏子也。操少機警、有權数。任俠放蕩、不治行業。汝南許劭、与從兄靖有高名。共覈論郷党人物。毎月輒更其題品。故汝南俗有月旦評。操往問劭曰、我何如人。劭不答。劫之。乃曰、子治世之能臣、乱世之姦雄。操喜而去。至是以討賊起。

嵩、沛国の曹操と軍を合せて賊を破る。操の父嵩、宦者曹騰の養子と為る。或いは云ふ、夏侯氏の子なりと。操、少くして機警、權数有り。任俠放蕩にして行業を治めず。汝南の許劭、從兄の靖と高名有り。共に郷党の人物を覈論す。毎月、輒ち其の題品を更む。故に汝南の俗に月旦の評有り。操、往きて劭に問ひて曰く「我は如何なる人ぞ」と。劭、答へず。之を劫す。乃ち曰く「子は治世の能臣、乱世の姦雄なり」と。操、喜びて去る。是に至りて賊を討つを以て起こる。

(以下、吉川英治『三国志』桃園の巻より引用 青空文庫版)

曹操は一日、その許子将を訪れた。座中、弟子や客らしいのが大勢いた。曹操は名乗つて、彼の忌憚ない「曹操評」を聞かしてもらおうと思つたが、子将は、冷たい眼で一眇したのみで、卑しんでろくに答えてくれない。

「ふふん……」

曹操も、持前の皮肉がつい鼻先へ出て、こう揶揄した。

「——先生、池の魚は毎度鑑ておいでらしいが、まだ大海の巨鯨は、この部屋で鑑たことがありませんね」

すると、許子将は、学究らしい薄べったくて、黒ずんだ唇から、抜けた歯をあらわして、

「豎子、何をいう！ お前なんぞは、治世の能臣、乱世の姦雄だ」

と、初めて答えた。

聞くと、曹操は、

「乱世の姦雄だと。——結構だ」

彼は、満足して去った。

(引用終了)

(注) 許劭の曹操評は、正史では「治世之能臣、乱世之姦雄」(『三国志』魏書・武帝紀注) あるいは「清平之姦賊、乱世之英雄」(『後漢書』許劭伝) であった。

七、孟徳

金刀版籍得雄蹲 銅雀楼台日月昏 七十二堆春草碧 更無寸土到児孫

金刀の版籍 雄蹲するを得て

銅雀楼台 日月昏し

七十二堆 春草碧く

更に寸土の児孫に到る無し

金刀⇨卯金刀。漢王朝の国姓「劉」のアナグラム。

七十二堆⇨曹操は自分の墓を盗掘されぬよう「七十二疑冢」を作らせた。

「大意」

魏の曹操は、劉氏の国土を乗っ取った。曹操は自分の権勢を天下に示すため、銅雀台を築かせた。天空の太陽や月が隠れて見えぬほど豪壮な高層建築だった。また曹操は自分の死後、墳墓が盗掘されぬよう、七十二もの偽の墓を作らせた。

それほど周到に悪知恵を働かせた曹操だったが、曹操の魏も、司馬氏に乗っ取られ、あえなく滅亡。結局、曹操は自分の子孫に寸土も残せなかった。残せたのは、彼の七十二箇所の墓に青青と生える春の雑草だけである。

「評」徳が薄ければ、結局、何も残せない。

吉川英治『三国志』臣道の巻より

時に、建安の四年八月朔日、朝賀の酒宴は、禁裡(きんり)の省台にひらかれた。曹操ももちろん、参内し、雲上の諸卿、朝門の百官、さては相府の諸大将など、綺羅星のごとく賓客(ひんきやく)の座につらなっていた。

拝賀、礼杯の儀式もすすみ、宴樂の興、ようやくたけなわとなった頃、樂寮の伶人や、鼓手など、一列となつて堂の中央にすすみ、舞樂を演じた。

かねて、約束のあつた禰衡も、その中にまじつていた。彼は、鼓を打つ役にあつて、「漁陽(ぎょやう)の三槌(さんたい)」を奏していたが、その音節の妙といい、撥律の変化といい、まったく名人の神響でも聞くようであつたので、人々みな恍惚と聞きほれていた。

——が、舞曲の終りとともに、われに返つた諸大将は、とたんに声をそろえて、禰衡の無礼を叱つた。

「やあ、それにおる穢(むさ)き者。朝堂の御賀(ぎよが)には、樂寮の役人はいうまでもなく、舞人鼓手もみな、淨らかな衣服を着るのに、汝、何ゆえに汚れたる衣をまとい、あたりを風(しらみ)をふりこぼすぞっ」

さだめし顔をあからめて恥じるかと思ひのほか、禰衡はしずかに帯を解きはじめて、「そんなに見ぐるしいか」

と、ぶつぶつ云いながら、一枚脱ぎ、二枚脱ぎ、ついに、真ッ裸になつて赤い犢鼻褌(ふんどし)一つになつてしまった。

場所が場所なので、満堂の人は呆気(あつけ)にとられ、あれよあれよと興ざめ顔に見ていたが、禰衡はすましたもので、赤裸のまま、ふたたび鼓を取つて三通(つう)まで打ち囃

した。

(中略)

曹操は遂に、激して云った。

「これ、腐れ学者。——汝は口をあげば常に自分のみを清白のようにいい、人を見ればかならず、汚濁のように誹(そし)るが、どこにそんな濁った者がいるか」

禰衡(ねいこう)も、負けずにいう。

「臭いもの身知らずである。——丞相には、自分の汚濁がお分りにならないとみえる」

「なに。予を濁れるものというか」

「然り。——あなたは賢そうに構えているが、その眼はひとの賢愚をすら識別(みわけ)がつかない。眼の濁っている証拠である」

「……申したな。おのれ」

「また、詩書を読んで心を浄化することも知らない。語は心を吐くという。あなたの口の濁っているのは、高潔な修養をしていない証拠だ」

「……うむむ」

「ひとの忠言を聞かない、これを耳の濁りという。古今に通ぜぬくせに、我意ばかり猛々ただけしい。これを曹操の濁りと申す。日々坐臥(ざが)の行状は、一として潔(きよ)よらかなるなく、一として放恣(ほうし)ならざるはない。これ肉体の濁りである」

「……」

「さらに、その諸濁の心は、誰ひとり頭の抑え手もないままに、いつとなく思いあがつて、遂には、反逆の心芽を育て、行く行くは、身みずからの荆棘(けいきよく)を作るにいたる。

——愚かしきかな。笑うべき哉」

「……」

(中略)

手をたたいて慢罵嘲笑する彼の容子は、それこそ、偉大な狂人か、生命知らずの馬鹿者か、それとも、天が人をしていわしめるため、ここへ降した大賢か——とにかく推しはかれないものがあつた。

曹操の面は、蒼白になっている。否、殿上はまったく禰衡一人のために気をのまれてしまったかたちで、この結果が、どんなことになるかと、人ごとながら文武の百官は唾をのみ歯の根を嚙んで、悽愴(せいそう)な沈黙をまもりあつていた。

孔融(こうゆう)は心のうちで、今にも曹操が、禰衡を殺害してしまいはせぬかと——眼をふさいで、はらはらしていた。

その耳には、やがて満座の諸大將が、劍をたたき、眦(まなじり)をあげて、

「舌長なくされ学者め。いわしておけば野放図もない悪口雑言。四肢十指をばらばらに斬りさいなんで目にものをみせてくれる」

騒然、立ちあがる気配が聞えた。——孔融はハツと眼をみひらいたが、とたんに満身の毛穴から汗がながれた。

曹操も立ちあがつていたからである。——が、曹操は、劍をつかんで雪崩(なだれ)行こうとする諸大將のまえに両手をひろげて、こう叫んでいた。

「ならん、誰が禰衡(ねいこう)を殺せと命じたか。——予を偉大な匹夫といったのは、当らずといえども遠からずで、そう怒り立つ値打はない。しかも、この腐儒(ふじゆ)などは、

鼠のごときもので、太陽、大地、大勢を知らず、町にいては屋根裏や床下でひとり小理窟をこね、誤って殿上に舞いこんでも、奇矯な動作しか知らない日陰の小動物だ。斬り殺したところでなんの益にもならん。それよりは予が、彼に命じることがある」

一同を制した後、曹操は、あらためて禰衡を舞台から呼びよせ、衣服を与えて、「荊州の劉表(りゅうひょう)と交わりがあるか」と、たずねた。

(引用終わり)

【赤壁の戦い・一】十八史略
曹操撃劉表。表卒。子琮奉荊州降操。劉備奔江陵。操追之。備走夏口。操進軍江陵、遂東下。亮謂備曰、請求救於孫將軍。亮見權說之。權大悦。

曹操、劉表を撃つ。表卒す。子の琮(そう)、荊州を挙げて操に降る。劉備、江陵に奔(は)し(る)。操、之を追ふ。備、夏口に走る。操、軍を江陵に進め、遂に東に下る。亮、備に謂ひて曰く「請ふ、救ひを孫將軍に求めん」と。亮、権に見(まみ)えて之に説く。権、大いに悦ぶ。

「趙雲が膝であどなく伸びをする」柳多留 4 3 篇

「戦いのひまに趙雲子守り唄」 1 4 5 篇

【赤壁の戦い・二】十八史略

操遣權書曰、今治水軍八十万衆、与將軍会獵於吳。權以示群下。莫不失色。張昭請迎之。魯肅以為不可、勸權召周瑜。瑜至。曰、請得数万精兵、進往夏口、保為將軍破之。權拔刀斫前奏案曰、諸將吏敢言迎操者、与此案同。遂以瑜督参万人、与備并力逆操、進遇於赤壁。操、権に書を遣(おく)りて曰く「今、水軍八十万衆を治め、將軍と呉に会獵せん」と。権、以て群下に示す。色を失はざるもの莫(な)し。張昭、之を迎へんと請ふ。魯肅、以て不可と為し、権に勸めて周瑜を召さしむ。瑜至る。曰く「請ふ、数万の精兵を得て、進みて夏口に往き、保(ほ)して將軍の為に之を破らん」と。権、刀を抜きて前の奏案を斫(き)りて曰く「諸將吏、敢て操を迎へんと言ふ者は、此の案と同じからん」と。遂に瑜を以て参万人を督せしめ、備と力を併せて操を逆(むか)へ、進みて赤壁に遇ふ。

(吉川英治『三国志』赤壁の巻より引用)

「予や、この一劍をもつて、若年、黄巾の賊をやぶり、呂布をころし、袁術を亡ぼし、さらに袁紹を平げて、深く朔北(さくほく)に軍馬をすすめ、ひるがえって遼東を定む。いま天下に縦横し、ここ江南に臨んで強大の呉を一举に粉碎せんとし、感慨尽きないものがある。ああ大丈夫の志、満腔(まんこう)、歡喜の涙に濡る。こよいこの絶景に対して回顧の情、望呉(ぼうご)の感、抑えがたいものがある。いま予自ら一詩を賦さん。汝らみな、これに和せよ」

彼は、即興の賦を、吟じ出した。諸将もそれに和して歌った。

その詩のうちに、

月は明らかに星稀(まれ)なり

烏鵲(うじゃく)南へ飛ぶ

樹(じゆ)を遶(めぐ)ること三匝(そう)

枝の依るべきなし

という詞があった。

歌い終わった後、揚州の刺史劉馥(りゆうふく)が、その詩句を不吉だといった。曹操は興をさまされて赫怒(かくど)し、立ちどころに劍を抜いて劉馥を手討ちにしてしまった。酔いがさめてからそれと知った彼はいたく沈痛な顔をしたが、その後悔も及ばず、子の劉熙(りゅうき)に死骸を与えて厚く故郷へ葬らせた。(引用終わり)

曹操の漢詩「短歌行」

對酒當歌、人生幾何。譬如朝露、去日苦多。慨當以慷、憂思難忘。何以解憂、唯有杜康。青青子衿、悠悠我心。但爲君故、沈吟至今。呦呦鹿鳴、食野之苹。我有嘉賓、鼓瑟吹笙。明明如月、何時可輟。憂從中來、不可斷絕。越陌度阡、枉用相存。契闊談讌、心念舊恩。月明星稀、烏鵲南飛。繞樹三匝、無枝可依。山不厭高、水不厭深。周公吐哺、天下歸心。酒に對しては當に歌ふべし。人生幾何ぞ。譬(たと)へば朝露の如く、去日(きよじつ)苦(はなは)だ多し。慨(なげ)きて當に慷(いた)むべし。憂思忘れ難く、何を以てか憂ひを解かん。唯(た)だ杜康(とこう)有るのみ。青青たる子(し)が衿(えり)、悠悠たる我が心、但だ君が故の為に、沈吟して今に至る。呦呦(ゆうゆう)として鹿は鳴き、野の苹(よもぎ)を食ふ。我に嘉賓有り。瑟(しつ)を鼓し笙を吹く。明明と月の如く、何の時か掇(と)るべき。憂ひは中より来たりて、断絶すべからず。陌を越えて阡を度(は)かり、枉(ま)げて用いて相存す。契闊して談讌し、心に旧恩を念(おも)ふ。月明らかに星は稀にして、烏鵲(うじゃく)は南に飛ぶ。樹を繞(めぐ)ること三匝(そう)、枝の依るべき無し。山は高きを厭(いと)はず。水は深きを厭はず。周公は哺(ほ)を吐きて、天下は心を帰す。

【赤壁の戦い・三】十八史略

瑜部将黄蓋曰、操軍方連船艦、首尾相接、可燒而走也。乃取蒙衝・鬪艦十艘、載燥荻枯柴、灌油其中、裹帷幔、上建旌旗、予備走舸、繫於其尾。先以書遣操、詐欲降。時東南風急。蓋以十艘最著前、中江举帆、余船以次俱進。操軍皆指言、蓋降。去二里余、同時發火。火烈風猛、船往如箭。燒尽北船、烟焰漲天。人馬溺燒、死者甚衆。瑜等率輕銳、靄鼓大進。北軍大壞、操走還。後屢加兵於權、不得志。操歎息曰、生子当如孫仲謀。向者劉景昇兒子、豚犬耳。

瑜の部将・黄蓋、曰く「操軍、方(まさ)に船艦を連ね、首尾相接す。燒きて走らすべし」と。乃ち蒙衝(もうしよう)鬪艦十艘を取り、燥荻枯柴(そうてきこさい)を載せ、油を其の中に灌(そそ)ぎ、帷幔(いまん)に裹(つつ)み、上に旌旗(せいぎ)を建て、予め走舸(そうか)を備へ、其の尾に繋ぐ。先づ書を以て操に遣り、詐(いつはり)りて降らんと欲すと為す。時に東南の風、急なり。蓋、十艘を以て最も前に著(つ)け、中江に帆を挙げ、余船、次(じ)

を以て俱(とも)に進む。操の軍、皆、指さして言ふ「蓋、降る」と。去ること二里余、同時に火を發す。火、烈しく、風、猛く、船の往くこと箭(や)の如し。北船を焼き尽くし、烟焰(えんえん)天に漲る。人馬、溺焼し、死する者、甚だ衆(おほ)し。瑜ら、輕銳(けいえい)を率ゐて靄鼓(らいこ)して大いに進む。北軍、大いに壞(やぶ)る。操、走り還る。後、屢と兵を權に加ふれども、志を得ず。操、嘆息して曰く「子を生まば当(まさ)に孫仲謀(そんちゆうぼう)の如くなるべし。向者(さき)の劉景昇の兒子は豚犬のみ」と。

「暖かな風に曹操氣が付かず」柳多留39篇

【後漢の滅亡】十八史略

初曹操自兗州牧、入為丞相。領冀州牧。封魏公。作銅雀臺於鄴。已而進爵為王。用天子車服。出入警蹕。以子丕為王太子。操卒。丕立。自為丞相・冀州牧。魏群臣言、魏當代漢。丕遂迫帝禪位、以帝為山陽公。帝在位改元者參、曰初平・興平・建安。元年至二十五年、則皆曹操為政時也。共參十一年。禪位又十四年而卒。漢自高祖元年為王、五年為帝、至是二十四世、四百二十六年。

初め曹操、兗州(えんしゅう)の牧より、入りて丞相と為る。冀州(きしゅう)の牧を領す。魏公に封ぜらる。銅雀台を鄴(ぎよう)に作る。已にして爵を進めて王と為り、天子の車服を用ひ、出入(しゅつにゅう)に警蹕(けいひつ)す。子・丕(ひ)を以て王太子と為す。操、卒す。丕、立つ。自ら丞相・冀州の牧と為る。魏の群臣、魏は当(まさ)に漢に代るべしと言ふ。丕、遂に帝に迫り位を禪(ゆず)らしめ、帝を以て山陽公と為す。帝、位に在り改元すること參、初平・興平・建安と曰ふ。元年より二十五年に至るまでは、則ち皆、曹操の政を為しし時なり。共に參十一年なり。位を禪つて又十四年にして卒す。漢、高祖元年に王と為り、五年に帝と為りしより、是(こゝ)に至りて二十四世、四百二十六年なり。

正史『三国志』魏書・武帝紀第一より

庚子、王崩于洛陽。年六十六。遺令曰「天下尚未安定、未得遵古也。葬畢、皆除服。其將兵屯戍者、皆不得離屯部。有司各率乃職。斂以時服、無藏金玉珍寶」。諡曰武王。二月丁卯、葬高陵。

……天下、尚未だ安定せず、未だ古へに遵ふを得ざるなり。葬畢(おは)れば皆、服を除け。其の將兵の屯戍する者は、皆、屯部を離るるを得ざれ。有司は各おの(なんぢ)乃が職を率ゐよ。斂は時服を以てし、金玉珍寶を藏する無かれ。……